

平成 30 年度学長戦略経費（重点分野研究プロジェクト）実績報告書

（平成 31 年 3 月）

報告者氏名・所属	安井友康・札幌校特別支援教育専攻
研究プロジェクトの名称	特別な教育的ニーズに対応する人材育成のための情報支援 — 支援教材の作成と ICT を活用した情報提供 —
プロジェクト担当者 (氏名・所属・職) ※代表者に●を付すこと	青山 眞二 ・札幌校・教授 齊藤 真善 ・札幌校・准教授 池田 千紗 ・札幌校・准教授 千賀 愛 ・札幌校・准教授 三浦 哲 ・札幌校・教授 ●安井 友康 ・札幌校・教授 小野寺基史 ・教職大学院・教授 萩原 拓 ・旭川校・教授 蔦森 英史 ・旭川校・准教授 片桐 正敏 ・旭川校・准教授 二宮 信一 ・釧路校・教授 小淵 隆司 ・釧路校・准教授 戸田 竜也 ・釧路校・准教授 阿部美穂子 ・釧路校・教授 五十嵐靖夫 ・函館校・教授 北村 博幸 ・函館校・教授 細谷 一博 ・函館校・准教授 大山 祐太 ・岩見沢校・講師 太田千佳子 ・附属特別支学校・副校長 ほか、附属学校教員 吉呑 正美 ・附属札幌小中学校特別支援学級・特命教頭 ほか、ふじのめ学級教員
研究プロジェクトの概要等（研究期間全体）	
<p>発達障害児を含め多様な教育的ニーズのある子どもを含めたインクルーシブ教育の実施に向けた環境整備が進められようとしている。特別支援教育の教員のみならず、通常学級における特別な教育的ニーズのある子どもやその保護者に対し、地域の特性に応じた教育的支援ができるような人材育成のための環境構築が求められている。これまで中期計画に基づき進められてきた本学のプロジェクト（H22-27年度）において、特別支援に関する情報提供のシステムを構築してきた。これらを利用し、通常学校ならびに特別支援学校の教員を育成するための支援方法と教材に関する情報提供の環境整備を進めるとともに、その効果に関する資料を収集した。</p>	
研究実績の概要（当該年度）	

特別支援教育プロジェクトにより構築してきた情報提供システム（ほくとくネット）など、これまでの成果をもとに、特別な支援を要する子どもの教育にあたる地域の人材育成に向けた取り組みを行ってきた。以下に示す通り、プロジェクト内容に対する地域ニーズに対応した活動を進めることができたが、現状におけるニーズの大きさを考えると、今後とも情報提供や支援環境の構築を進めることが求められる。

1. 情報ネットワークを通じた情報提供のためのコンテンツ開発

(1) 発達障害およびその近接にある子どもたちへの包括的心理・学習アセスメントの実施

発達障害、特に発達性読み書き障害のある子どもの包括的アセスメントを実施し、保護者および学校、医療機関へのフィードバックを実施した。主として医療現場と学校現場からの紹介により、各種包括アセスメントを実施し、同時に担当教員へのコンサルテーションも実施した。これらの取り組みは、アセスメント結果を評価するデータベース構築に関連するものである。

(2) 特別支援教育のアセスメント結果を包括的に評価するためのデータベース構築

包括的な情報が付随する包括的アセスメントデータをデータベースに蓄積し、データベース構築のためのネット環境の整備と情報システムの構築を行っている。アセスメントデータは現時点で52件である。引き続き包括的アセスメントデータを継続して蓄積することで、適応行動の程度に及ぼす要因、学習到達度に及ぼす要因、対人関係に及ぼす要因などについても検討し、データベース構築を目指す。

(3) ほくとくネットの掲載情報充実

特別支援教育に関する本学の情報発信サイト「ほくとくネット」の掲載の充実を図った。特にこれまで「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業」として継続的に取り組んできた発達障害支援学習補助テキストと学習用ワークブックについて、全項目の音声付きファイルのアップロードを行なった。

(4) 附属特別支援学校における実践的取り組み

本校中学部と群馬大学教育学部附属特別支援学校中学部との交流を、インターネットと通じたテレビ電話を通じて行った。地域の違う友達とのやりとりから、自分の住む地域について学習する機会となった。さらに、修学旅行で北海道を訪れた群馬の友達と直接交流を行い、コミュニケーション及び人間関係の構築に関する学びにつなげることができた。

(5) 釧路校フィールド研修の実践

特別支援学校教員免許の取得を考えている2年生の学生を対象に、附属特別支援学校において3泊4日のフィールド研修を行った。学生は、特別支援学校の授業を観察した後、附属職員と授業やその中での子どもたちのかかわりについてディスカッションを行ったり、自分たちの学びを発表し合ったりした。実践を通して研修を行う中で、特別支援学校で子どもたちに教育を行う魅力を実感する学生も多かった。また、附属特別支援学校の教員にとっても、自らの取り組みを学生に説明しながら、改めて自己の実践を振り返る機会となっていた。さらに、宿泊した附属特別支援学校から近い八雲養護学校の視察研修を行い、病弱教育を行う学校の実践についての研修も行った。（取り組み成果については、4. 教職大学院、学部、附属学校の教員養成における共同の取り組みにも記載）

(6) インクルーシブな身体活動支援を通じた支援情報の収集と情報提供

インクルーシブな身体活動プログラムを定期的（月一回）実施し、発達障害のある子どもの支援方法について情報収集を行うとともに、「ほくとくネット」等を通して

情報提供を行った。さらに附属学校(ふじのめ学級と2018年5月に実施)や、地域の自治体(札幌市と2019年2月に実施)との共同企画として、地域の障害のある児童生徒と障害のない児童生徒、学生、教員等による活動を実施するとともに情報発信をおこなった。地域ニーズに応えるとともに、学生の実践力の向上、支援方法に関する情報提供などの成果につながった。なお活動については、国際学会(ヨーロッパ・アダプテッド身体活動学会:イギリス大会)にて報告を行い国際的な評価を受けた。なお活動には、道内外からの視察者(道内の教員、福祉支援者、弘前大学、道外附属学校の教員等)が訪れるなどの情報発信にもつながった。

(7) 発達障害児とその親を支援するプロジェクト「おひさまクラブ」の実施

地域の保育所・幼稚園、小学校、児童発達支援センター、及び医療機関と連携し、発達障害のある就学期の子どもとその親を支援するプロジェクト「おひさまクラブ」を実施した。プロジェクトでは、12組の年長児～小学校1年生の子どもとその保護者に対し、釧路校学部1～3年生39名が、1家族あたり、3～4人の学年縦割りからなる支援チームを作り、年間を通じて支援実践に取り組んだ。これにより、発達障害のある子どもとその家族を支援するために必要な、子どもの実態把握力、プログラム作成力の向上と、支援者としての意識や態度形成を図った。学生へのアンケート調査の結果、学生の発達障害児とその家族への支援に関する効力感と意欲が有意な差をもって向上したことが確認された(詳細は別紙報告参照)。

2. 研修会、学会および研究大会への参加・助言、情報提供

- ・平成30年8月10日(金)、八雲町民センター大集会室にて、函館校の特別支援教育スタッフによる「道南地域における現職教員研修プログラム(発達障害児への理解と支援)」を実施しました。本研修プログラムは昨年度、熊石で開催した研修会に引き続き、平成30年度北海道教育大学学長戦略経費(重点分野研究プロジェクト)「特別な教育的ニーズに対応する人材育成のための情報支援—支援教材とICTを活用した情報提供—」の一環として実施した。当日は「発達障害児の理解(北村博幸教授)」「発達障害児への具体的支援(五十嵐靖夫教授)」「通常学級における合理的配慮に基づく発達支援(細谷一博准教授)」の3部構成で実施し、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員や行政職員まで、50名を超える参加者があった。
- ・上富良野町にて特別支援教育に関する研修会の講師(WISC検査結果の読み取りと学習指導場面での活用)を行なった(旭川校:片桐)。
- ・上川教育研修センターにて「幼小連携教育」の研修講座講師を行なった(旭川校:片桐)。
- ・旭川市教育研究会神居・神楽ブロック研修会でアセスメントの研修会講師を行った(旭川校:片桐)。
- ・平成30年度道北地区児童館連絡協議会にて児童厚生員研修会の講師を行った(旭川校:片桐)。
- ・美深町特別支援教育講演会にて講師を行なった(旭川校:萩原)。
- ・遠軽町立東小学校望の岡分校・遠軽町立遠軽中学校望の岡分校にて研修会講師を行なった(旭川校:萩原)。
- ・第61回北海道私立幼稚園教育研究大会にて講師を行なった(旭川校:萩原)。
- ・平成30年度臨床発達心理士会研修会北海道支部研修会にて講師を行った(旭川校:蔦森)。
- ・平成30年度旭児連研修会にて講師を行った(旭川校:蔦森)。
- ・平成30年度胆振教育局独自研修会にて講師を行った(旭川校:蔦森)。
- ・平成30年度旭川市子ども総合相談センター第6回研修事業にて講師(アセスメント研修～WISC-IV検査の実施)を行った(旭川校:蔦森)。
- ・子labo:特別支援教育に関わる支援者(教師、作業療法士、言語聴覚療法士など)による事例検討会を主催、月1回(4～11月までに8回実施済み)、延べ参加者約90

名

- ・特別支援学校の自立活動・体育の指導内容相談：特別支援学校に訪問し、自立活動・体育における運動内容、指導方法、教材、授業作りについての助言（4回）作成資料を添付（資料1）
- ・通級指導教室の指導内容相談：まなびの教室、ことばの教室に訪問し、運動の苦手さ、教具の使い方、生活動作の指導方法についての助言（6回）、作成資料を添付（資料2）
- ・特別支援学級の環境設定相談：特別支援学級に訪問し、授業中の座位姿勢、教具の使い方についての助言（1回）、作成資料を添付（資料3）
- ・特別支援教育専攻2年次全員が参加する附属小中学校特別支援学級ふじのめ学級において3週間の実習を行うにあたり、通常の事前指導に加えて、実習生が7月の研究大会に参加した。事前指導の一環としてふじのめ学級が主催する研究大会に参加し、会場設営や授業の撮影などを行うことで、将来の勤務校において研究大会を開催するための重要な経験をjする機会となった。研究大会の開催にあたり、大学教員から2名の教員（青山眞二・千賀愛）が研究協力者として参加し、助言者の小学校長や市教委らとともに授業開発や授業研究の助言を行った。
- ・空知教育局における発達障害児の支援方法における情報提供を行った。
- ・岩見沢市における発達障害児の支援方法における情報提供を行った。なお特別支援教育専門家チームにおいて、通常学校の教員への研修を端としているコーディネーターから、本プロジェクト「ほくとくネット」の研修用テキストおよびワークブックに関して「大変わかりやすく情報支援ツールとして効果的である」旨の意見が寄せられた。
- ・平成30年12月8日（土）、北海道特別支援教育学会道北支部を主催として、北海道教育大学旭川校にて「就学前後をつなぐ支援ニーズの現状と課題」を実施。
- ・2019年度の研修プログラムは、熊石で実施
- ・附属特別支援学校の公開研究協議会において、武富博文氏をお呼びし、新学習指導要領について講演をいただき、現在求められる附属特別支援学校の役割について校内で研修を実施。
- ・附属特別支援学校での2年生12名の臨床実習授業を2019/2月に実施し（釧路校）、特別支援教育の実習カリキュラム内容についての研究を行った。
- ・そのほか、本事業にかかわる理解啓発のための講習会を実施（研究成果の公表実績欄参照）

3. 調査等

- ・東京学芸大学附属特別支援学校及び埼玉大学附属特別支援学校の視察を行い、2校の教育環境の状況や交流及び協働学習の実践、教育課程の編成について情報収集を行った。また、教育実習や教員の研修の状況についても意見交流を行い、特別支援教育における人材育成に関する各校の取組について学ぶ機会を得た。
- ・福岡教育大学附属小・中学校で行われた「国立大学法人附属学校・特別支援学級ネットワーク第4回」に参加した（8月3日）。北海道、京都、奈良、広島、福岡、宮崎の教育大附属特別支援学級の教員、計22名が参加し、各校の実践について発表交流を行った。福岡教育大教授の中山健先生より、「知的障害特別支援学級におけるiPadを活用した学習について」、授業づくりに関する情報提供を受けた。読み書きや算数に困難を抱える生徒に対して有効と思われるアプリの紹介と、それらを教育現場で用いたことの成果や、今後の課題について検討された。
- ・「附属学校が果たす役割に対する期待」に関するアンケート調査の実施
附属小学校・ふじのめ学級合同開催による全道研究大会において、附属校が果たす役割に対する参加者の期待を調査するため、北海道教育大学附属学校への期待に関するア

ンケート調査を実施した。参加者に550部を配布し、62部を回収、回収率は11.2%であった。アンケートは「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「まったくそう思わない」の5件法で回答を得た。附属小が期待される役割については、と「質の高い研究授業の展開」「新しい支援・指導の方法の開発」では「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせて9割を超えた。「附属校の役割」の項目では、「指導開発」「授業展開」「研修機能」に高い期待が見られた。「附属校を経験した(経験する)教員には、どのような変化があるか」という項目に対しては、「勤務後に周囲からの期待が高まる」「教職能力全般における専門性が高まる」「大学との連携や共同研究を通し学びや気づきがある」に「とてもそう思う」「そう思う」の回答者が多かった。全体として、附属校に対する期待では、「研究授業の公開棟による地域の教員への研修機能」「質の高い研究授業の展開」への期待が高かった一方で、「附属校としての独自の教育実践の展開」や「附属校としての独自の教育実践の展開」には高い期待は見られなかった。附属校を経験した教員の変化については、他の教員からの支援・指導の助言を求められるようになり、周囲の期待も高まる一方で、保護者への対応力や子どもの特性に応じた指導という点では、あまり変化しないと考えられていた。附属小学校・ふじのめ学級が地域の教育において果たす役割に対する期待は大きく、また附属校を経験した後も授業づくりについて周囲から指導・助言を求められていることが分かった。質問用紙と結果の図表については別紙を参照。

4. 教職大学院、学部、附属学校の教員養成における共同的取り組み

(1) 望ましい教員養成の在り方プロジェクト

北海道教育大学・教職大学院・附属小中学校(ふじのめ学級)との連携による「望ましい教員養成の在り方プロジェクト」の取組を実施した。プロジェクト内容は①教員養成学部(学生の教員養成機能)②教職大学院(教育委員会との連携:現職教員の研修機能)③附属学校(実践の場:プラットホームの機能)の検討であった。研究方法は、プロジェクトチームの共同研究として、学部実習指導担当教員(千賀)、ふじのめ学級代表(吉呑特命教頭)、ふじのめ学級教員兼教職大学院院生(山口)、教職大学院教員兼指導教員(小野寺)を中心に以下の要領で研究を進めた。実施目的は、①教職大学院教員が学部実習生に対して、授業づくりに向けた「心構え」や「基本のき」をミニレクチャーし、実習に向かう準備を整える(8月22日・水)、②学部実習生を指導する指導教員の授業を参考に、望ましい授業づくりについて研修を深める、③学部実習生の授業をマイクロ・ティーチングの手法を使って分析し、望ましい授業づくりについて研修を深めることであった。

取り組みの成果としては、①従来のガイダンスの中にミニレクチャー(30分)を取り入れたことで、学生の実習に入る心構えがより明確になり、自信をもって取り組もうとする姿勢が見られた。一部の学生からは、「気持ち楽になり、子供たちに伝えたいと思っている内容について、自信を持って積極的に取り組もうと意欲が湧いた」との意見も聴取された。②今回は、担任(教職大学院生)の学級のみが対象(配属学生3名)となったが、大学教員(担任の指導者)、担任(学部学生の指導者)、授業をした学生が一堂に会して、授業分析や授業後の反省等を実施したことで、学生はもちろんのこと、学生を指導した担任(大学院生)にとっても、学部学生への指導の在り方等について大変勉強になったとゼミの際に報告を受けた。まさに今回の取組は、コンサルテーションとしての効果も表れたのではないかと考えている。

取組の課題としては、今回、北海道胆振東部地震によって、当該学校も実習期間中にやむなく休校せざるを得ない状況となり、当初予定していたマイクロ・ティーチングの授業分析が十分できなかったこと、また、今回は対象学生を1学級3名のみとしたが、今後は可能な限り多くの学生に対しても本取組を実施することが望ましいと考えている。

(2) 附属特別支援学校との協働による臨床観察実習

・附属特別支援学校との協働により、2年生11名(釧路校)の臨床観察実習(特別支援教育

総合研究)を2019年2月に実施した。授業観察から収集されたデータを元に、学生グループでカンファレンスを行い、その中から生じた問題意識等について、附属特別支援学校教員の参加を得たカンファレンスを行うことによって、学生が主体的に「問題」を発見し、問題意識を深める学びにつながった。このような問題発見を含む特別支援教育実習カリキュラムのあり方について、今後さらに研究を深める必要がある。

5. プロジェクトの位置づけと評価

- ・本プロジェクトは、中期計画番号15)として学部全体として、特別支援教育の学校教育に密着した研究である。その研究成果については、学術的に発信するだけでなく、本学の教員養成教育の充実のために活用するとともに、地域の特別支援教育にかかわる教育課題の解決に応用した。さらに中期計画番号21)グローバル化への対応として、海外の関係学会や教育現場への情報発信をおこなった。また新たな学びのニーズに関する情報を収集・研究し、その成果をテキスト・教材等として可視化するとともに、多様なメディアを通して、本学全体の研究に関する広報に取り組むなど、上述した通り大きな成果を上げることができた。

今後の研究プロジェクトの推進計画

特別支援教育にかかわる社会的ニーズへの対応として、本学の中期計画に基づき以下の研究プロジェクトの実施を予定している（一部継続）。

1. ほくとくネットと通じた学生、学校現場への情報提供と情報共有の拡大を継続的に実施
2. 教員向け研修プログラムの実施
附属特別支援学校の公開研究協議会において、現在求められる附属特別支援学校の役割について校内で研修を行う予定
3. 附属との連携による人材育成プログラム
附属特別支援学校での臨床実習授業を行う
 - ・特別支援教育の実習カリキュラム内容についての研究を実施

4. 個別の支援計画作成における実態把握を効果的に行うための心理アセスメントの実装プロジェクト

(1) 質問紙などを用いた評価の実施と普及

SDQ（子どもの強さと困難さアンケート）、子どものQOL尺度（古荘ら、2014）、社会的スキル（磯辺ら、2006）、読み書きスクリーニング検査など、原則標準値があり、無料で用いることができ、手軽に実施可能なものを用いる。実施しても、活用ができれば意味がないので、実施した学校を直接訪問し、活用法などの研修を行う。訪問を実施する他、活用法については、マニュアル化してネットに公開する。

(2) 個別の支援計画作成における実態把握のための尺度開発

前述した既存の尺度の実施と同時に新たな尺度開発を行う。こうすることで、妥当性の検討も行うことが可能である。加えて、個別の支援計画作成の際の実態把握に用いることができるものを開発することで、よりの確で簡便な実態把握が可能になる。現在ほくとくネット上に公開されているプリアセスメント・チェックリストをブラッシュアップし、簡便でより使い勝手を重視した標準値のあるアセスメントとして、再度開発を行う。完成した尺度は、学会誌に公表するほか、ネットに公開する。読み書きスクリーニング検査については、就学前の幼児も評価可能な簡便なものを開発する。

(3) 専門的な個別検査の研修

WISC-IV や KABC-II のほか、適応行動を評価する Vineland-II 適応行動尺度、感覚ブ

ロファイルについての研修を行う。研修内容はレベル別を実施し、学校や各教員のニーズに応じて実施する。

- 1) 検査結果を反映した個別の支援計画の作成の実際に関する研修
- 2) 各検査の実施法に関する研修
- 3) 各検査の解釈とケースの適用に関する研修
- 4) 各検査法の概要に関する研修

教育現場や地域での活用等

- ・教育現場で活用できる指導事例や授業展開、発達障害児の理解についての研修会のため、各教育現場においては、当日配布した資料がそのまま教育現場で活用できるものとする。
- ・附属特別支援学校における試行的実践
本年度試行的に実施したインターネットを通じた交流は、離れた友達との交流を実践し、さらに地域を意識させる教育活動が展開できる。また、画面を通じたやりとりは、発達障がいのある児童生徒にとっては、直接的なやりとりよりも緊張を和らげることができると考えている。今後も交流及び協働学習の方法について地域への提案が可能である。

研究成果の公表実績（当該年度）

【著書】（著者、書名、出版社、発行年・・・等）

森口佑介（編著）自己制御の発達と支援，金子書房，2018。（片桐正敏 第7章自閉スペクトラム症のある子どもの自己制御の支援（P. p. 78-96）執筆）

【学術論文】（投稿中も含む）

（著者、表題、雑誌名、巻・号、発行年、頁・・・等）

片桐正敏，Bayley-III 乳幼児発達検査における運動発達評価の実際と支援の方向性，LD 研究，27(2)，2018，136-138.

村山恭朗・伊藤大幸・中島俊思・浜田 恵・片桐正敏・田中善大・高柳伸哉・野田 航・辻井 正次，一般小中学生におけるいじめ経験と養育行動の関連に関する横断的検証，健康心理学研究，31(1)，2018，31-41.

片桐正敏・蔦森英史・萩原 拓，自閉症スペクトラム障害および学習障害のある子どもの知的機能と感覚特性，適応行動の特徴，臨床発達心理実践研究，投稿中.

小淵隆司・戸田竜也，「へき地・小規模校における特別な支援を要する児童を包摂する複式学級の柔軟な授業のあり方」，へき地教育研究第72巻，2017，39-45.

阿部美穂子・中田紗英・松田麻美，へき地小規模校の授業から抽出されるインクルーシブ教育の実現要因．へき地教育研究，73，2018，53-68.

阿部美穂子・二宮信一・西田めぐみ・小林麻如，インクルーシブ教育体制における特別な支援ニーズのある子どもの家族支援—アイスランドにおけるインタビュー調査から見えてきたもの．釧路論集，50，2019，61-68.

【学会発表、シンポジウム、セミナー、演奏会、展覧会、競技会、普及啓発イベント等】

（名称、開催年月日、開催場所、参加者数・・・等）

- ・特別な教育的ニーズに対応する人材育成のための情報支援～北教大特支プロジェクトの取り組みと評価～、北海道特別支援教育学会第13回大会(函館)、安井友康・青山眞二・齊藤真善・三浦 哲・千賀 愛・池田千紗・萩原 拓・片桐正敏・蔦森英史・小淵隆司・阿部美穂子・木戸口正宏・二宮信一・戸田竜也・五十嵐靖夫・北村博幸・細谷一博・大山祐太・小野寺基史・附属特別支援学校・附属札幌小中学校特別支援学級、2018/07
- ・特別支援学校における外部専門家としての作業療法支援、第13回北海道特別支援教育学会、池田千紗、中島そのみ、仙石泰仁（2018年7月）
- ・特別支援教育における教師に対する作業療法支援の効果—アンケートを用いた1事例の検討

- 一、第49回北海道作業療法学会、池田千紗、中島そのみ、仙石泰仁（2018年6月）
- ・文章題を苦手とする児のつまずきの解明 -問題解決過程で描いた図による評価-、第49回北海道作業療法学会、諫早悠希、長谷部希晶、中島そのみ、仙石泰仁、池田千紗（2018年6月）
- ・Factors Affecting Inclusive Physical Activity in Recreation A case study of children with and without disability in the sports club, European Congress of Adapted Physical Activity 2018, Worcester UK, 2018/7, Yasui, Tomoyasu, Senga, Ai, Ikeda, Chisa & Yamamoto, Rihito
- ・読み書きの躓きは学業成績を予測する, 日本特殊教育学会第56回大会, 片桐正敏, 2018. 9. 22-24, 大阪市.
- ・特別支援学校の教員に求められる専門性は何か, 日本特殊教育学会第56回大会, 逢坂一伸・片桐正敏, 2018. 9. 22-24, 大阪市.

<シンポジウム>

- ・安田小響・足立匡基・萩原拓・村山恭朗・浜田恵・高橋芳雄, 新しい子どもの発達アセスメントツール～子どもの発達の包括アセスメントについて～, 日本心理臨床学会第37回大会, 2018. 8. 31, 神戸市.
- ・通常学級における特別支援教育の実際Ⅲ～対話的な学びを促す指導の工夫～, 日本特殊教育学会第56回大会, 青山眞二、太田千佳子、上野 樹、工藤陽介、2018. 9. 22-24, 大阪市

<講習会>

- ・スクリーニングとケースカンファレンス, 5/21, 山形県長井市長井南中学校, 約30名
- ・特別支援教育研修会, 6/14, 富良野市特別支援連携協議会コーディネーター研修, 34名
- ・札幌市特別支援教育コーディネーター養成研修会, 6/27, 7/4, 札幌市, 約150名
- ・北海道心理教育アセスメント研究会, 7/7, 10/20, 12/15, 2/2, 札幌市, 約150名
- ・私保連東区保育者研修会, 7/26, 札幌市, 約60名
- ・保育心理士養成講座, 8/4, 札幌市, 20名
- ・北海道学校教育相談研究会, 8/7, 札幌市, 約60名
- ・カウンセリング研修講座(2級), 10/16, 10/23, 札幌市, 8名
- ・砂川地域療育推進協議会講演会, 10/31, 砂川市, 50名
- ・豊富町特別支援教育連携協議会講演会, 11/2, 豊富町, 約30名
- ・保育心理士フォローアップ講座, 12/1, 札幌市,
- ・北海道特別支援学級設置学校長協会後志支部研修会, 12/3, 余市町,
- ・北見市特別支援教育連携協議会研修会「今、求められる特別支援教育～障がいの特性に応じた自立活動の実際～」, 12/6, 北見市, 約120名
- ・長沼町立舞鶴小学校特別支援教育研修会, 12/10, 長沼町
- ・平成30年度地域連携研修「知的障害児教育における主体的・対話的で深い学びの具現化に向けた授業改善」, 12/12, 東川町, 約60名
- ・上市町教育センター研修会「通級指導教室の仕組みと運営の実際」, 2/5, 富山県上市町, 約60名

【テキスト、報告書、研修資料等】

(名称、発行年月日、発行部数、配付場所、配布者数・・・等)

- ・各研修会資料: 「ほくとくネット」により公開中

添付資料

- ・報告書: 平成30年度「おひさまクラブ」プロジェクトによる学生の変容(釧路校 阿部美穂子・小淵隆司・木戸口正宏・戸田竜也)

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 附属学校が果たす役割に対する期待に関するアンケート調査（ふじのめ学級ほか） ・ 各種研修会資料
ダウンロード可能なドキュメント	http://hokutoku.net/%E3%83%88%E3%83%94%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B9/%E6%95%99%E8%81%B7%E5%93%A1%E8%82%B2%E6%88%90%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0/%E5%AD%A6%E7%BF%92%E8%A3%9C%E5%8A%A9%E3%83%86%E3%82%AD%E3%82%B9%E3%83%88/ http://hokutoku.net/%E3%83%88%E3%83%94%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B9/%E6%95%99%E8%81%B7%E5%93%A1%E8%82%B2%E6%88%90%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0/%E5%AD%A6%E7%BF%92%E7%94%A8%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%83%96%E3%83%83%E3%82%AF/
関連URL	http://hokutoku.net/
問い合わせ先	氏 名：安井友康 電 話：011-778-0433 E-mail：yasui.tomoyasu@s.hokkyodai.ac.jp